
キャンディ

sadaki

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キャンディ

【Nコード】

N3306C

【作者名】

sadaki

【あらすじ】

高校生の稔子はある日一本の木を見つけた。それはどこか懐かしかった。だがその木に隠された稔子の封じられた忌々しい記憶を蘇ようとしている・・・そして怨念と殺戮の物語が今10年の年月が経ち今静かに始まろうとしていた・・・

第一話：始まりの音

昭和六十年8月3日ちようど真夏の時の話である。

「ねえお父さんアイス食べたいなあ」

「そうだな・・じゃあそこのかどを曲がったところに確か駄菓子屋さんが、

あつたよなあ」

そついうと父は私の手を取り満面の笑顔で駆け足でもしたそつにうきうきしていた。

「うん、やったあ」

父とは実に一年ぶりに会った。父と母は去年正式に離婚し母が私を引き取ってから父とは一度も会っていなかった。どちらが引き取るか随分裁判でもめて以来久しぶりに見た父は少し背中が小さく見えた。

「ねえお父さんあそこに昔神社なかったかな?」

私は父の手をほだき一本のおかしな木を見つけた。なぜかその木はまだらに色が違つとこがあり、形もへん!!

「んっ??あゝあそこは昔懸命寺つていうお寺があつてなあゝ確か

稔子が5歳の

頃にお寺が火事にあってなあゝ燃えてなくなっただよ」

確かに、周りにも同じような木があり焼焦げてるように言われれば
そういう風に見える。

稔子「ふゝん」

父「さあゝ稔子アイスは何かいいかい？」

でもなんだろうこの木だけ何かが違うような・・私はこの木だけ覚
えてる気がする。
忘れちゃいけないような何かを・・

「と・し・こ」

「えっ??」

「と・し・・」

「稔子ゝ何してるんだあゝ」

「えっ??あっお父さん」

「どうしたんだ??アイス食べないのか??」

「今私を・・」

「んっ??」

「いやなんでもない」

「さあゝアイスを食べに行くぞ」

「うん」

私はこの場所を離れることにした。でもさっきの声はなんだったんだろ・・確かに誰かに呼ばれた気がしたんだけどな・・

「おい稔子どうしたんだ??アイスはいらないのか?」

父は少し意地悪そうな顔して言った。

「いるに決まってるじゃん」

「はははそうか」

父は笑った。私も笑った。

ここ一年こんな風に笑ったのはいつぶりぐらいなんだろう・・お父さんとお母さんが離婚してから

私はお母さんと二人っきりの生活していたけどいつも心から笑えなかった。お母さんは暗い顔を

しないようにしてると思うけど私には余計に寂しそうに見えた。

「お母さんとは楽しく暮らしてるか?」

「うゝん楽しいかな」

私はあんまりお父さんには心配をかけたくないからつい心とは反対

の気持ちをいつてしまった・
ちよつと辛いけどな・

「そうか・でも今はこうして母さんの許しが出たからな」一ヶ月に一回だけ稔子にも会える
こんなうれしいことはないぞ」

「うん・」

「どうした?」

私は本当は家に帰ってほしいって思ってる・
また昔みたいに三人でお出かけしたりご飯食べたり
他愛もない話したいのに・

「もうこんな時間だ、ご飯でも食べにいくか」

「うんそうだね」

私は昔のようにまたみんなといっしょにいたい・

漆黒の彼方

空の彼方からまた夜が来ようとしている。今日は33度を超える暑さになり、片手にハンカチを持ちひたいの汗を拭う会社帰りのサラリーマンやファーストフードで楽しそうに話してる恋人たちでにぎわっていた。私と父は駅前でご飯をたべることにした。

「相変わらず駅前にはぎやかだな」

「今の時間はね」

父はタバコをとり火をつけた。

「もーうくさいー!」

「そうかたいこというなって」

「はあーまったく・・・」

「お待ちせいたしました。てんぷらそばとすだちうどんになります。」

「おっきたきた」

急いでタバコの火を消し割り箸をぱちつと割った。

「お父さんこのうどん大好きだったもんね」

「あゝこのうどんは格別うまいんだわ」

「私もこのてんぷらそば大好きなんだよね」

ここに最後にきたのはちょうど一年前に家族三人で食べにきたのが最後だった。

あの日はみんななぜかいつもと空気が違っていた。父も切ない顔をしていたし母も

いつもと違って口数が少なかった・・・そしてあの夜・・・

「高校はちゃんといってるか?？」

急に話しかけられて思わず動揺してしまった。

「うつつん、なんとかね」

「それにしても悪かったな、お前がちょうど受験の年に母さんとなんなことに

なつて、お前にも迷惑が」

「そんな事ないよ、だってしょうがなかったんでしょ?？」

正直腹の中ではむかむかしていた。父のそういう態度に・・・

「そうだな」

しばらく二人は下に俯いたまま沈黙が続いた。

「友達はできたのか?？」

沈黙を破るように父が口をひらいた。

「もともと貴ちゃんと祥ちゃんとも同じ学校だからすぐ周りにもなじめたよ」

「そうか。昔からいっしょに遊んでいたよな」

「稔子覚えてないかもしれないけど、今日よったあの神社にみんなでよく遊んでいたの」

「そうなの？？覚えていいるような覚えていないような」

本当に記憶があるような無いような・・・でも私はあの場所が嫌いだった。

なんでだろう楽しい記憶のはずなのに・・・

「覚えてないのも無理ないだろう」

父はタバコに火をつけて一息ついた。

「あまえがまだ5歳か6歳の頃だっもんな」

父は楽しそうな顔して話し始めた。

「そんな小さい頃の話なんだ。でも火事で焼けちゃったのが残念だったな」

「・・・そうだな」

父の顔が少し硬直したようにみえた。

「でもなんで燃えちゃったの??」

「そうか・・・稔子あのことも覚えてないのか」

「あのこと・・・?」

「覚えてないことをわざわざ思い出す必要ない」

父は食後に出されたほうじ茶を飲み干した。

「さあゝそろそろ電車の時間だから行こうか」

「そうだね」

カバンを持ち、会計を済ました。私もほうじ茶を飲み干した。

・・・・・・

父は電車の切符を買って戻ってきた。

「じゃお父さんは行くわ」

「うん・・・今度いつ会える??」

私は少しやり切れない気でいた。

「わからないけどまた近いうちに連絡する」

「うんかった」

「そんじゃ」

「うん、バイバイ」

私は本当はお父さんに帰ってきてほしかった。今日はそのことを言うために来たのに、結局何も言えなかった。断れる事を恐れてるからだろうな。

「さて帰るか」

それにしてもどうしてあの神社燃えたこと教えてくれなかったのかな・・

それにあの父の青ざめた顔は・・小さい頃のことは結構よく覚えているんだけど・・

そうだ帰ったら貴ちゃんに電話して聞いてみようかな。

「・・午後6時に買い物帰りの10歳代の女性が切りつけられる事件が発生致しました。

女性は病院で治療を受けていますが、今だ意識不明の重態です。

犯人は今だ捕まって、

おらず地域の住民は十分気をつけて下さい。なお目撃者の証言では年齢は40歳台で

背は168cmで中年太りした男で黒の帽子に黒のジャケットをきているとの事です。

新しい情報はいり・・」

「やだっ怖いねえ」

「本当だね〜でもお前が襲われることはないでしょ」

「なんだって!!」

ざわざわざわ

通り魔か。怖いな〜早く帰ろう。

.....

目の前にあの場所が現れた。

「昔ここでみんながよく遊んだんだ〜。全然覚えてないな〜」

一本の木は焼あとを何箇所も残し今にも倒れそうなのに立ち入れ
禁止の

看板が立っていた。

「今度みんなでここにきてみよう」

「んっ・・・」

誰・・・ 誰かが木の下にいる。暗闇の中で姿がよく見えない

「そっそこ危ないですよ」

その人は私の霞んだ声を聞こえた。そして立ち上がった。

・午後6時に買い物帰りの10歳代の女性が切りつけられる事件が発生しました。

女性は病院で治療を受けていますが、今だ意識不明の重態です。犯人は今だ捕まって、

おらず地域の住民は十分気をつけて下さい。

まさか・・

「お前は・・」

その人が私に問いかけた・・

月の光が辺りを照らし初めてその人の姿が在られた。

目撃者の証言では年齢は40歳台で背は168cmで中年太りした

男で黒の帽子に黒の

ジャケットをきている・・

現れたその男はテレビでいていた男だ・・

「お前もしかして沢村としこか??」

男は私にゆっくり近づきはじめた・・私はそこにたっていたられるだけで精一杯だあ・・

ドクツウ　ドクツウ

心臓の音が聞こえる・・

殺される・・

私の鼓動がそう思わせる・・・

「お前は沢村としこかと聞いてるんだ!!」

「ひいい」

私は座り込んだ・・・

男は私にどんどん近づいてきた・・・
手に何かをもっていた・・・包丁??

殺される・・・

「いやーーーーー」

だめだ・・・いつ意識がうすれく・・・

「パパ・・・やめて・・・」

誰??

「やっめって・・・」

だれな・・・の・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3306c/>

キャンディ

2010年10月10日18時50分発行